7　ヒ素試験法

（略）

装置　（略）

（略）

操作法

試験溶液を発生瓶に入れ、ブロモフェノールブルー試液１滴を加え、アンモニア水又はアンモニア試液で中和する。ただし、食品擬似溶媒が水の場合には中和の操作は省略できる。この溶液に塩酸（１→２）５mL及びヨウ化カリウム試液５mLを加え、２～３分間放置した後、塩化スズ（Ⅱ）試液５mLを加えて室温で10分間放置する。次に水を加えて40mLとし、亜鉛（ヒ素試験用）２ｇを加え、直ちにＢ及びＣを連結したゴム栓Ｈを発生瓶に付ける。Ｃの細管部の端はあらかじめヒ化水素吸収液５mLを入れた吸収管Ｄの底に達するように入れておく。次に発生瓶は25℃の水中に肩まで浸し、１時間放置する。吸収管を外し、必要があればピリジンを加えて５mLとし、吸収液の色を観察するとき、この色は、次の標準色よりも濃くてはならない。

標準色の調製は、試験溶液の試験と同時に行う。試験溶液と同量の食品擬似溶媒とヒ素標準溶液2.0mLを発生瓶に入れ、以下試験溶液と同様に操作して得た吸収液の呈色を標準色とする。

（削る）

（削る）

２－メルカプトイミダゾリン

試験溶液及び２－メルカプトイミダゾリン標準溶液をそれぞれ５μLずつ用いて、次の操作条件で液体クロマトグラフィーを行うとき、試験溶液の液体クロマトグラム上に、２－メルカプトイミダゾリンのピークを認めてはならない。

操作条件

カラム充てん剤　オクタデシルシリル化シリカゲルを用いる。

カラム管　内径4.6㎜、長さ150㎜のステンレス管を用いる。

カラム温度　40℃

検出器　紫外部吸光検出器又はフォトダイオードアレイ検出器を用い、波長238nmで操作する。

移動相　メタノール及び水の混液（１：９）を用いる。２－メルカプトイミダゾリンが約２分で流出する流速に調節する。

9　ヒ素試験法

（略）

装置　（略）

（略）

操作法

試験溶液を発生瓶に入れ、ブロモフェノールブルー試液１滴を加え、アンモニア水又はアンモニア試液で中和する。ただし、浸出用液が水の場合には中和の操作は省略できる。この溶液に塩酸（１→２）５mL及びヨウ化カリウム試液５mLを加え、２～３分間放置した後、塩化スズ（Ⅱ）試液５mLを加えて室温で10分間放置する。次に水を加えて40mLとし、亜鉛（ヒ素試験用）２ｇを加え、直ちにＢ及びＣを連結したゴム栓Ｈを発生瓶に付ける。Ｃの細管部の端はあらかじめヒ化水素吸収液５mLを入れた吸収管Ｄの底に達するように入れておく。次に発生瓶は25℃の水中に肩まで浸し、１時間放置する。吸収管を外し、必要があればピリジンを加えて５mLとし、吸収液の色を観察するとき、この色は、次の標準色よりも濃くてはならない。

標準色の調製は、試験溶液の試験と同時に行う。試験溶液と同量の浸出用液とヒ素標準溶液又はヒ素標準溶液（乳等の容器包装試験用）2.0mLを発生瓶に入れ、以下試験溶液と同様に操作して得た吸収液の呈色を標準色とする。

10　ヒ素試験（材質試験）法

試料１ｇを分解フラスコに採り、硝酸20mLを加えて内容物が流動状になるまで弱く加熱する。冷後硫酸５mLを加えて白煙が発生するまで加熱し、液がなお褐色を呈するときは冷後硝酸５mLを追加して加熱する。この操作を液が無色又は淡黄色となるまで繰り返す。冷後シュウ酸アンモニウム試液15mLを加え、再び白煙が発生するまで加熱し、冷後水を加えて20mLとし、これを試験溶液とする。

試験溶液10mLを用いて、ヒ素試験法により試験を行うとき、これに適合しなければならない。ただし、標準色の調製に用いる浸出用液は水とし、ヒ素標準溶液は、乳等の容器包装試験用のものを用いる。

11　ヘキサン抽出物試験法

試料約2.5ｇを精密に量り、温度計、還流冷却器及びかくはん棒を装置した2,000mLの三頚（けい）フラスコに採り、ヘキサン1,000mLを加え、これを20～25分の間に50℃となるように徐々に加熱し、この温度で２時間保った後抽出液を温時ろ過して重量既知の共栓三角フラスコ中に採り、ろ液の重量を量る。この場合、回収率は少なくとも最初の溶媒の90％以上でなければならない。